奔流

題字揮毫・梅原猛

«もくじ»

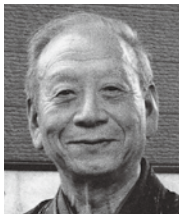
■特集：創立6周年記念講演会in信州飯山　～子孫のために安心して住める郷土を残そう～
2頁・“水系一環”で自然との共生を探る…… 今中　京平(事務局長)
6頁・“大河”千曲川―信濃川に育まれた縄文文化……佐藤　雅一(正会員)
8頁・脱原発をめざす自治体の首長たち……佐藤　和雄(正会員)

«第18号»
■発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL　042-381-7770
■発行人・根津　東六(共同代表)
■編集人・矢間秀次郎(共同代表)
■〒振替・00120-0-710488

大河の一滴 (18)

水を愛して ―水をもって世を正し、命を紡ぎ、分かち合い、水と共に生きる―

根津　東六(共同代表)



本会は平成22(2010)年4月23日、広報誌『奔流』を創刊しました。揮毫は縄文の火焔型土器を国宝に推奨された哲学者・梅原猛先生から直筆で賜わり、幸先よい会活動の原動力となりました。同年5月22日、「千曲川・信濃川復権の会」と、その名に思いを込め、東京電力西大滝ダムのある千曲川流域の飯山市で創立総会を開催、正式にスタートしました。当日の記念講演、高橋裕東京大学名誉教授の「河川にもっと自由を～千曲川・信濃川をめぐって」は、多くの示唆と深い感銘を与えました。

はや6周年を迎えるに当たり、会員各位に感謝の意をもって、今回は原点の河川をテーマに特集を編みました。ぜひ、ご詳覧、ご批評下さい。

①平成20(2008)年9月に、JR東日本「宮中ダム」での11年に及ぶ大量の不正取水が発覚。よって、2009年3月～2010年6月まで国交大臣の全量取水停止処分となり、ゲートを開け全量放流となった(平成19、20年度はサケ遡上数不明)。②その結果、平成21年160尾が宮中ダムに遡上。以後、遡上期は60トン/sから80トン/s、100トン/sの試験放流を5年間実施。③平成26、27年度は急増。中魚沼漁協を中心に実施した稚魚放流や自然産卵の相乗効果か。今後が楽しみだ。④上流千曲川西大滝ダムの平成23年35尾は、10月9、10日、同ダムゲートを開け、全量放流があったからとのこと。

サケ遡上と稚魚放流の数値

年度	宮中ダム	西大滝ダム	稚魚放流数
H17年	26	0	25
18年	25	2	66
19年	―	0	215
20年	―	3	346
21年	160	2	521
22年	146	3	650
23年	135	35	700
24年	297	11	600
25年	408	6	800
26年	736	8	715
27年	1,514	12	

※サケは(尾)稚魚は(千尾)。
▲出典①信濃川中流域水環境改善検討協議会、②長野県農政部園芸畜産課水産係。

作家・井出孫六先生は著書『過去と向き合い生きる』の中で、「1920年代まで上田での鮭の水揚げは60トン～70トンほどあって、(中略)飯山市西大滝に電力のためのダムが完成した時点で鮭のための千曲川産院は、冷たく固く閉ざされてしまった」と指摘。「長野県統計」によれば、昭和6(1931)年鮭漁獲量6万7459kg、鱒5万3010kgと記録されています。これぞ千曲川本来の実力と、恐れいりました。

相沢博文高水漁協組合長は、鮭はもとより、モクズカニの復活を目指したいと夢を語っています。また、同郷の昆虫学者で信濃川再生に生涯を懸けられた故・樋熊清治さんは、「自然界の川は、命の水あっての川である。人間社会の為に半分は取水利用しても、半分は自然の流水として生態系を守り、共生を図るべきである」との持論を遺し、われわれに命運を託されました。信濃川渇水流量が124トン/sの現状から、その半分62トン/sが最少最低の維持流量として、現行協定の維持流量40トン/sにプラスして放流するならば、夏場の水温が28度を超える懸念はなく、一挙に解決することでしょう。

JR東日本「宮中ダム」取水発電は、東京都内の電車、構内照明、空調など総電力使用量の半分を賄うドル箱です。地元との共存共栄を図るべく、既に放流量は市内4ヵ所の表示計で公開しています。併せて取水量も公開し、公正な企業モラルの範を全国に示すよう期待されています。